

アフガニスタン退避家族への 日本語支援の試みと課題

奥野由紀子（東京都立大学）
yukokuno@tmu.ac.jp

【要旨】

現在、アフガニスタンは大きな混乱の中にある。本稿は、教育や医療が脆弱なアフガニスタンから、日本に退避してきた家族に接したことばの教師が、大学の授業を活用して学生たちと行った日本語支援と、そこから学生たちが学んだことについて報告し、ことばの教師として何ができるかを模索しつつ感じた課題について述べる。

1. はじめに

バイデン米大統領は2021年4月、米中枢同時テロから20年となる9月11日までに、アフガン駐留米軍を完全撤退させると発表し、米軍の撤退が始まると、1996～2001年まで政権を握っていたイスラム主義組織タリバンが支配地域を急拡大させ、2021年8月15日に首都カブールを制圧した。タリバンによる政変が起きて以来、女子の中学、高校教育が停止され、実質、アフガニスタンの女性の教育の機会は小学校6年間のみとなった。タリバン暫定政権はイスラム法に基づく統治を目指す、女性の権利を抑圧しているとして国際社会は承認していない。また、旧政権への協力者は反タリバンと見なされ監視、財産没収、連行などの締め付けが強く、麻薬密売の常習化や、汚職の蔓延などから社会は混乱し、治安が乱れ、多くの国の大使館や国際機関は撤退したままである。国際社会の関心が低下し、国際援助も細る中、干ばつや2022年6月には大地震が襲い、失業者も増え、貧困から臓器や人身売買が横行しており、アフガニスタンからの退避者が後を絶たない状況にある。本稿はそのようなアフガニスタンから退避してきた家族に接したことばの教師が学生たちと共に何ができるか模索した事例報告である。ただし、個人が特定されないよう、個人的な情報は割愛し報告する。

2. 経緯

筆者の知人Cはセキュリティ会社を経営しており、海外での邦人の安全を守るため、アフガニスタンにおいて現地の職員と共にセキュリティ業務に十年以上、従事してきた。2021年8月にタリバンがアフガニスタンを制圧後、これまでの政府協力者への締め付けがひどくなり、暴行や殺害が散見されるようになり、日本にいるCのもとに、かつての現地職員Xから援助要請があった。そこでCは外務省に退避要請を行い身元引受人となり、2022年1月にXと弟のZが日本へ脱出した。筆者は2022年4月にテレビ番組で取り上げられたことでその事実を知り、ことばの教師として、何か力になれないか考えるようになった。

3. 大学の授業を活用した取り組みの概要

3. 1 「日本語教育学概論」を活用した取り組み

折しも 2022 年 4 月から筆者は都内の大学において、「日本語教育学概論」という日本語教育の養成課程で授業を担当し始めており、その授業を通して何かできないか考えてみることにした。「日本語教育学概論」は、日本語学習者について知り、日本語教授法や教材の基礎知識、日本語教師の役割など日本語教育学専攻の学生にとって基礎となる必須のことがらについて学ぶ授業である。教科書として『超基礎日本語教育』（くろしお出版/2019）を用い、日本語教育を多角的に捉え、段階的に学びつつ、グループ実習まで経験し、日本語教育についての理解を深めることを目的としていた。履修者は学部 2 年生が 6 名、学部 4 年生が 1 名、大学院博士前期課程の大学院生が 3 名、研究生が 3 名で、大学院生と研究生にはブラジルや中国からの留学生も含まれていた。筆者はこのクラスの学生と共に何ができるか考えてみることにした。授業内容は大きなシラバスの変更は難しいことから、日本語教育学の基本をアフガニスタン退避者への日本語支援を想定しながら、関連させて学ぶこととした。表 1 に、授業内容を示す。

表 1 授業概要

回	授業内容	退避者への日本語支援を想定し取り上げた内容
1	オリエンテーション 日本語教育とは	課題としてアフガニスタンの現状を調べてくる
2	日本語学習者とは	留学生、技能実習生、移民や難民など多様な学習者
3	日本語能力の測定と試験	C をゲストスピーカーとして招く
4	コースをデザインしよう	退避者 X と Z を想定した日本語教育 3 回分のコースデザイン及び、ニーズ・レディネス調査
5	さまざまな教授法	場面シラバス・機能シラバス
6	学習レベルと教材・教具	市販の教材分析⇒自作
7	学習者の目から日本語を見てみよう	Y のノートや、オンライン授業の様子のシェア
8	ティーチャートークとやさしい日本語	媒介語の使用について考える
9	教室でのやりとりと学習者へのフィードバック	すでに退避者 2 名に教えている大学院生 G が教えている様子をビデオで観察し、媒介語の使用やフィードバックについて学ぶ
10	授業の流れを考えてみよう	グループで準備・教案作成
11	授業準備	グループで準備・教材作成
12	実習 1	オンライン実習と観察
13	実習 2	オンライン実習と観察
14	実習 3	オンライン実習と観察
15	まとめ・振り返り	Scrapbox を利用して振り返り、最終レポート提出

例えば、第 4 回目の「コースをデザインしよう」という回においては、退避者 2 名を想定した日本語教育 3 回分のコースデザインを行うために、ニーズやレディネス調査をインタビューで行った。その結果、以下のようなことが明らかとなった。

<ニーズ>

- ・ 日本語のウェブサイトの情報収集できるようになりたい
- ・ 元の仕事に関わる専門用語が日本語で話せるようになりたい
- ・ 病院で使う日本語を勉強したい
- ・ ムスリムである自分たちで食事などに気をつけたい。
- ・ 家族を呼び寄せるための手続きができるようになりたい。
- ・ 家族と一緒に暮らせる一軒家を借りられるようになりたい
- ・ ビザの更新を自分たちでできるようになりたい

<レディネス>

- ・ パシュトゥー語、英語使用者
- ・ 挨拶程度の日本語はすでに覚えている。
- ・ 2人とも発音がよい。
- ・ Zさんはすでに五十音を覚えている（ひらがな&カタカナ）
- ・ Zさんは週に3回地域の日本語クラスに通っている（『みんなの日本語』を教科書として使用）

同時に、Xはアフガニスタンに残してきた家族が心配で、勉強にあまり集中できない状況であることもわかった。これらを踏まえ、授業実習では学生たちが自作の教材を作成し実施することとした。Scrapbox というオンラインで双方に書き込める無料のツールを利用し、授業内容やディスカッション、XとY、2名の状況や様子などについての連絡を行った。

3. 2 「学外演習」を活用した取り組み

また、授業内では3回のみの実習授業となるため、「日本語教育学概論」の履修者の中から、日本語教育経験のある大学院生2名と共に、週に2回の日本語授業をオンラインでも同時並行的に行うこととした。2022年5月から9月まで全28回実施した。一人週一回担当し、筆者もランダムに入れるときに入り授業を担当した。またこの日本語授業は、「学外演習」として単位化し、毎回の授業をチームティーチング記録として引継ぎを行い、共有した。オンライン教材として国際交流基金の「まるごとeラーニング」の「まるごと+」を用いつつ、本人のそのときどきの状況に合うような内容や表現を補いながら授業を行った。授業では、家族のことが心配で勉強が手につかない、他に聞いてほしいことがある場合など、日本語学習を行うのが難しいと判断した場合には英語を用いたフリートークの時間とし、2名の状況をみながら、信頼関係を築きつつ進めるようにした。Zは地域の日本語教室に通っていることから、二人の進度が異なってきたため、二人の希望もあり、途中から、二人を別の時間帯でワンツーマンでの授業に変更した。

XとY、2名の様子や、日本語の学習の進捗状況などは「日本語教育学概論」においてシェアするようにし、ある日のオンライン授業の様子をXとZの了承を得て録画し、授業の進め方や、フィードバックの仕方、媒介語の使用について、実習生たちはビデオで観察した。

4. 授業の内容

4. 1 「日本語教育学概論」での実習内容

3 回の実習では研究生、学部生、院生混合の ABC の 3 グループがそれぞれ、実習時期の 2 名の状況やニーズも考慮しながら内容を考え実施した。まだひらがなが覚えられていない X に配慮し、ローマ字、英語を使用して教材は作成された。

A グループはイスラム教徒が日本で暮らすうえで必要な場面（外での食事）や表現、「豚」「酒」の漢字認識を取り上げた（表現例：お酒が入っていますか。この肉は何ですか）。

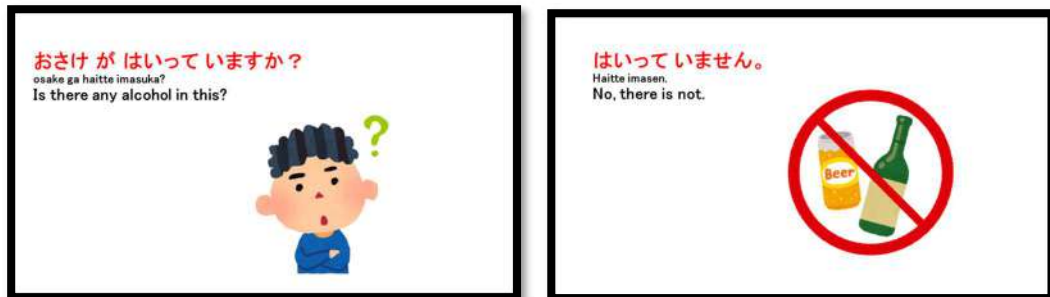


図 1 A グループのスライド例

B グループは医師の免許を持ち、専門的な日本語も学びたいというニーズをくみ取り、実習が暑い 7 月に実施されることを加味して、熱中症をトピックとして取りあげた。アニメ「働く細胞」を用いて、熱中症に関連する語彙や表現をとりあげた授業を行った（語彙例：暑い、涼しい、水分、帽子をかぶる、熱中症。文型例：～たほうがいい）。熱中症予防の対策について、話す際には、アフガニスタンでの熱中症対策についても、X と Z から学生たちが教わった（図 3 参照）。



図 2 B グループのスライド例



図 3 X が紹介してくれたアフガニスタンの熱中症予防対策食品

Cグループは7月に2名の家族10名がアフガニスタンから退避することが決まったことから、家族が住むことになる地域での暮らしに必要な情報などを内容として扱い、自然な日本語を意識した表現を取り上げた（表現例：あの～すみません、〇〇が買いたいんですが、どこにありますか）。



図3 Cグループのスライド例

4. 2 「学外演習」を活用した授業の様子

ひらがなや日本語の最も基本的なところから「まるごと+」のビデオ映像を利用した授業を開始し、二人の刻々と変わる状況に合わせて、授業は行われた。刻々と変わる状況とは、国の家族10名もアフガニスタンから退避することになったこと、それに伴うビザの取得、引っ越し、車の国際免許の取得、子どもの教育の手配などである。Xは、アフガニスタンからのナッツやドライフルーツを輸入する仕事をしたいとも話していた。身元引受人のCの家に7月まではXとZは住んでいたが、7月の家族の来日に伴い、XはCの近くに子どもたちと住み、Zは両親や他の兄弟たちと別の場所に住むことになった。その準備などで忙しく、日本語の授業ができない週や、家族が無事に日本に退避できるか心配で眠れず、勉強が手につかない日もあったが、フリートークをすることで気が紛れたり、落ち着くことが多いようであった。また、フリートークでは、タリバン政権の女性教育に対する方針とイスラム教の立場などについて、話すことも多かった。Xは女性教育の必要性を強く感じており、それも退避の要因であることが窺われた。日本語の授業を活用して、話すことで精神的なバランスを保っていた部分も感じられた。



図4 クラスでの表現を導入した「まるごと+」のビデオを利用したスライド例

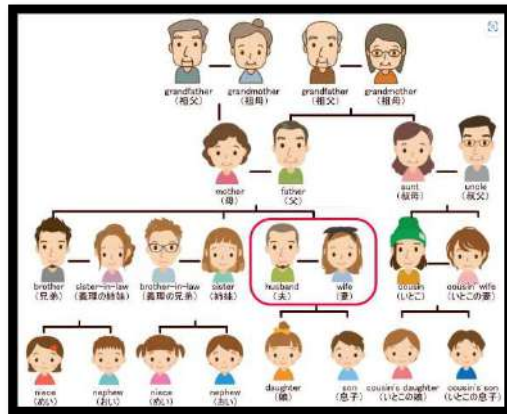


図5 家族について話すために用いたスライド例



図6 Xが紹介してくれたアフガニスタンでとれる松の実

5. 授業外の取り組み

日本語の授業支援以外に、筆者はXとZがCと共に住んでいる家を訪ね、オンライン以外でも会う機会を持つように心がけた。家族が来日した後もXの家族、Zの家族のもとに足を運んだが、その都度、お茶と松の実を出しもてなしてくれた。精神的にも非常に困難な状況の中にあってもアフガニスタン人は客をもてなす文化を大事にしているということを感じた。

また、家族の来日に伴い、衣類や子どもの学用品（ランドセル等）が必要だということで、学生たちと共に、生活に必要な物資を集めて、家族に届けた。他にはできることとして、チャリティーライブを行い、学生も参加し、わずかながら寄付を行った。クラウドファンディングについても、クラウドファンディング経験者から話を聞き、学生たちが内容案を出すなど、実施を試みたがこれは様々な事情（実施主体を誰にするのかという問題やリターンの難しさなど）により、実施に至らなかった。

6. 学生が学んだこと

アフガニスタンから退避してきた学習者を支援しながら日本語教育について学んだ学生たちは、多

くのことに気づき、実体験として学ぶことができた。以下は実習後の Scrapbox からの学生の記入例である。

【実習から得た新たな気づき】

- ・フィードバックを正直にすることも大事→モチベーションに繋がる
- ・学習者の意欲に影響することを意識して、慎重に encourage と feedback を使い分ける必要がある
- ・学習者との人間関係を学習面以外でも築いていく必要がある
- ・教科に関する知識だけでなく常識的な知識も増やさないと対応できない
- ・学習者との共通の言語への理解も大事
- ・国語の視点ではなく日本語教育の視点が大事
- ・日本語母語話者は学習者のレベルを計ることがとても難しい
- ・日本人への国語と学習者の日本語教育の違い→日本語教育は予想ができない。臨機応変さが必要
- ・広範囲の知識が必要（どんな話題が飛んできてでも対応できるように）
- ・時々疑問点がないか確認することが大事→空気作りも重要
- ・ジェスチャーをすることで伝わりやすく
- ・ppt 中の情報量
- ・お互いの文化も尊重することも大事
- ・教科書外の表現も大事
- ・硬い表現と現代的な言葉のバランスが重要
- ・日本語教育に携わると小さな誤用が気にならなくなる
- ・言語特有の誤用もある
- ・母語話者教師が必ずしも優れているとは限らない
- ・時間配分・肯定的 FB の重要性

また、最終レポートからは、以下のことへ言及が多くあり、日本語教育にこれから携わろうと考えている学生たちにとって大変貴重な経験を X と Z にはさせてもらったことがわかる。

- ・日本語教育は世界・社会と大きく関わっていること
- ・「日本語学習者」の中には様々な境遇の方がいること
- ・日本語教育で「何を教えるか」は学ぶ人のニーズやレディネスに合わせて考える必要があること
- ・日本語教育を通して何か自分たちにも出来ることがあるかと思えたこと

このように授業を活用して日本語支援を行うことで、むしろ支援側に大きな気づきや学びが得られる可能性が大きいことがわかった。

7. 今後の課題

今回、授業を活用して日本語支援がわずかながらでもできたこと、日本語教育を学ぶ学生が多くの気づきを得たことは成果として挙げられる。しかしながら、退避者への支援ということを考えると残された課題の大きさと、ことばに携わる者ができることへのギャップの大きさに愕然とする。

まずはタリバンから狙われる命を救うため、C は自身の会社へ雇用する形式で高度人材ビザを取って、退避を支援した。しかしながら、実際に C の会社において日本で彼らができることはないという。何か仕事をしたいと思っても高度人材ビザでは、従事できる仕事に限られており、日本語がまだ十分

でない彼らができる仕事はない。Zは筆者に、毎日が時間の無駄のように感じる、誤解され、拒否され、自分達の気持ちや考えをシェアできる相手がいないと訴えてきた。そこには身元引受人CとX、Zとの信頼関係のゆらぎも関係している。難民や退避家族は高度な教育を受け、専門職を持った人々も多い。しかし、そのような力を日本で生かす道がなければ、生きる意味を見いだせないのである。支援を受けるばかりではなく、社会の一員として、役に立ちたいという思いを重く受け止める必要がある。人として尊厳をもって生きていけるような支援体制を整える必要がある。退避者と関わる中で、ビザの問題、言葉の問題、経済的な問題、健康の問題、心の問題、将来への不安、さまざまな問題が絡んでいることを直接知ることができた。また、身元引受人との信頼関係が保てなくなると退避者は途端に頼る人がいなくなることも知った。普段から様々な人とつながり、セーフティネットを築く必要がある。ことばの教育に携わる者としてできることは、ことばを教えるだけではなく、彼らとつながる一員であることを自覚し、相談し合えるような支援団体や関係者と日頃から連携しながら包括的な支援へとつなぎ、自立を実現する手立てを共に考えていくことであろう。

本稿を書いている2022年12月20日にも、アフガニスタンの全国の公立と私立の大学で、女性が教育を受けることができなくなったというニュースが飛び込んできた。この決定により、医学部、教育学部を含むすべての分野において、女性が高等教育を受ける機会が閉ざされることになる。つまり、女性の医療従事者、女性の教育者が、今後は育成されない事態が現実となる。家族以外の男性に肌を見せられず、医療施設では女性の医療従事者にしか診察してもらえない、学校では女性教員にしか教えるを受けられない女性たちにとって、致命的である。何が起きているのか、今後どうなるのか、ことばの教育に携わる者として、何ができるのか、学生や関係者と共に知り、考えていきたい。

参考文献

森篤嗣・太田 陽子・奥野 由紀子・小口 悠紀子・嶋 ちはる・中石 ゆうこ・柳田 直美（2019）森篤嗣（編著）『超基礎日本語教育』くろしお出版

朝日新聞<<https://www.asahi.com/articles/DA3S15508592.html>>（2022年12月20日）

外務省<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/genjo.html>>（2022年12月29日）

まるごと e ラーニング<<https://www.marugoto.org/e-learning/>>（2022年12月29日）

Scrapbox<<https://scrapbox.io/?lang=ja>>（2022年12月29日）